

# 抑うつ的な感情を装うことによる 包括システムにおけるロールシャッハ変数への影響

## Susceptibility to Malingered Depression on the Rorschach “ Comprehensive System”

文学研究科教育学専攻博士前期課程修了

吉 河 喜 一 郎

Kiichiro Yoshikawa

### I. はじめに

心理検査が詐病の影響をどの程度うけるのかという問題は重要であり、これまでは特に司法領域で研究されてきた。しかし米国における医療保険制度が、医療費の削減に向けた新しい保険制度であるマネージドケアへと変革していくにつれ、心理療法やカウンセリングの保健の支払いという観点から、医療現場においても詐病の問題に注目が集まるようになってきた。いまだ過剰な検査、投薬をすればするほど診療報酬が増える出来高払いの医療保険制度である我が国においても、医療制度の改革は最も重要な問題のひとつであると考えられ、医療政策の進行とともに詐病研究もまた、その数が増えていくと予想される。なかでもうつ病は極めて頻度の高い精神疾患でありながら、意外と診断が難しいことから、医療現場において「本当にこの人はうつ病なのか？うつ病を装っていないだろうか？」という疑問に対する回答を求められる事態が多くなり、うつ病を装った場合、心理検査でそれを見抜けるのか、うつ病ではないのにうつ病らしくしようと努めた場合、心理検査にはどのような特徴となって表れるのかについて改めて関心が高まってきている。中でもロールシャッハ・テストはその情報の多さから、クライアントの人格を理解したり、症状や病理を評価するために行う心理検査の中でも重要な地位を占めており、古くから詐病研究においてはロールシャッハ・テストが使われてきた。

そこで本研究ではうつ病について知識を与えずに、個人の経験知の範囲で思い起こせる抑うつ気分を装ってもらうという方法で、ロールシャッハ・テスト上にその変化が現れるのか、またそれがどこに現れるのかを検討した。

## II. 先行研究

### 1. 初期の詐病研究

病院や法廷など様々な場所で用いられ始めたロールシャッハ・テストの信頼性を、実証的に検証したFosberg (1938, 1941) の一連の研究が、ロールシャッハ・テストにおける最も初期の詐病研究といえよう。最初の研究でFosbergは夫婦である2人の被検者に、それぞれ通常の教示でロールシャッハ・テストを行い、次に良い印象を与えるような性格を装わせてテストを行い、次に悪い印象を与えるような性格を装わせ、最後は良くも悪くもない印象を与えるような性格を装わせてテストを行った。数日間で繰り返し4回のテストを施行した結果、教示の違いに有意差は見られず、ロールシャッハ・テストでは性格を装うことはできないと述べた<sup>1)</sup>。その後、前研究における被検者数の少なさを考慮し、さらに心理学部の学生50名(男性25名、女性25名)を対象に同じように4つの異なる教示を与えて性格を装わせ、繰り返し4回のロールシャッハ・テストを施行した。その結果からも教示の違いでは有意差は見られなかった。Fosbergは「ロールシャッハ・テストは性格を主観的に操作できるものではなく、永続的な性格を忠実に描き写すものである」とし、ロールシャッハ・テストで結果を装うことはできないと結論した<sup>2)</sup>。

Benton (1945) も詐病の疑われたケースを検討するなかで、Fosbergの結果を支持する報告をしている。足の痛みを訴えていた海軍に所属する22歳の男性は、兵役を逃れるために身体疾患を詐病しているという疑いがかけられ、Bentonが彼の記録を再検討した。面接や他の心理テストの記録では、彼はかなり自発的に取り組み、検査者とも会話をしていたのだが、ロールシャッハ・テストになると彼の態度が変わり、明らかに不快感や不安を示し、感情を無理に抑圧するような態度になったのである。ロールシャッハ・テストの結果には、反応数の少なさや反応時間の遅さとして表れた。Bentonは病気を装っていることがばれないように用心深くなっていて、それがロールシャッハ・テストには表れていると述べ、ロールシャッハ・テストを装うことは難しいと報告した<sup>3)</sup>。

CarpとSchavzin (1950) はFosbergの方法に修正を加えて、心理学部の学生20名を対象にテスト・リテスト方法で詐病の研究を行った。被検者は最初に「あなたは徴兵され長期間兵役に服することになります。これから行うテストの結果で徴兵されるかどうかが決まります。好ましくない結果だと徴兵されないでしょう」という状況をイメージするよう教示された後、ロールシャッハ・テストを受けた。その3週間後に今度は「あなたは精神病のために病院にいます。もちろん退院したがついています。これから行うテストの結果で退院できるかどうかが決まります。好ましい結果だと退院できるでしょう」という状況をイメージするよう教示され、再度ロールシャッハ・テストを受けた。その結果、数人の被検者はテスト間で反応にかなりの違いが見られ、教示により反応を変えることができ、ロールシャッハ・テストは操作できないとしたFosbergとは反する結果となった<sup>4)</sup>。

EastonとFeigenbaum (1967) はこれまでの研究の方法論的問題である、リテストが結果に与える

影響を考慮し、被検者に統制群を加えて同じようにテスト・リテスト方法で研究を行った。ボランティアとして集められた22名の大学生被検者は、最初に普通の教示でロールシャッハ・テストを受け、リテストでは統制群として半分の11名が、再度通常の教示でロールシャッハ・テストを受けた。残りの11名は実験群として「あなたは徴兵され、長期間兵役の任務についてきました。これから行うテストの結果が好ましくなければ、あなたは任務からはずされるでしょう」という状況をイメージするよう教示された後、ロールシャッハ・テストを受けた。その結果教示により、多くの人がよくみる部分領域であるD（一般部分反応）、形態の特徴だけに基づいた反応であるF（純粹形態反応）、Obj（生命のない物体反応）、そして特にR（総反応数）が減少することが分かった<sup>5)</sup>。

## 2. 統合失調症に関する詐病研究

SeamonsとHowell、Carlisle、Roe（1981）らは、刑務所や病院から12名の統合失調症でない者、12名の統合失調症の疑いのある者、12名の過去に統合失調症と診断された者、12名の統合失調症もしくは精神病の者、4グループ計48名を被検者としてテスト・リテスト方法で詐病の研究を行った。最初に各グループのうち半分が「あたかも普通に、上手く適応できているかのように装ってください」という教示でロールシャッハ・テストを受け、残りの24名は「あたかも心が病んでいるように、もしくは精神病のように装ってください」という教示でロールシャッハ・テストを受けた。その25日後に今度はそれらの教示を入れ替えて、再度ロールシャッハ・テストを施行した。教示を入れ替えたのはリテストの影響を考慮しての方法である。またロールシャッハ・テストは全て、Exner（1974）による包括システムに基づき行われた。その結果、普通を装った教示により、ありきたりで慣習的な反応であるP（平凡反応）が増え、精神病を装った教示によりSx（性反応）やBl（血液反応）、切断されたもの、戦っている反応、不適切な結合反応が増加した。Seamonsたちは専門家であれば精神病を装っている者と、そうでない者を区別することは可能であろうと述べた。さらに、X+%（総反応数に含まれている多くの人がよくみる反応の割合）、FQ+（多くの人がよくみる反応をさらに詳細に説明したもの）、L（総反応数におけるFの割合）は期待値の範囲内であるのに、Bl（血液反応）、親密さへの欲求を表すT（濃淡材質反応）、対処不能の感覚を表すY（濃淡の違いで立体やつう拡散反応）、感情的なうつ状態に関するV（濃淡立体反応）、課題遂行へのストレスを表すm（無生物運動反応）、不適切な結合反応が記録中に多く見られた場合、それは精神的な病気を装っている可能性があるとして報告した<sup>6)</sup>。

AlbertとFox、Kahn（1980）たちは、これまでの詐病研究で指摘されてきた方法論的な問題の一つである、病気を装わせる際の教示の曖昧さに着目し、実際のロールシャッハ・テストの専門家が精神病を見破ることができるのかという目的で、更なる詐病研究を行った。この研究は1980年代以降、多くの詐病研究のモデルとされ影響を与えることになった。Albertは6名の妄想型の統合失調症患者、18名の大学生（全員が18歳から28歳の白人で、ロールシャッハ・テストを含め性格テストの経験のな

い者) から、次のような方法でロールシャッハ・テストの記録を集めてきた。6名の妄想型の統合失調症患者には通常の教示方法でロールシャッハ・テストを施行した。次に6名の大学生には「テスト結果が妄想型の統合失調症のようになるようテストを受けてください。その際、装っていることが分からないようにしてください」と教示しロールシャッハ・テストを施行した。ほかの6名には先程と同じ教示をし、なおかつ実際の妄想型の統合失調症患者の思考内容や思考過程について録音された、25分間のカセットテープを聞かせた後にロールシャッハ・テストを施行した。残りの6名には統制群として、通常の方法でロールシャッハ・テストを施行した。ロールシャッハ・テスト後、妄想型の統合失調症に関する17件からなる質問紙を先程の18名の大学生に施行したところ、情報ありの詐病群 (Informed Fakers) は情報なしの詐病群 (Uninformed Fakers) よりも高得点を示し、前もって与えられた情報がしっかりと影響していることが確認された。ロールシャッハ・テストの記録は全米中の46人の専門家にランダムに配られ、記録から診断される被検者の症状についての解答が求められた。その結果、情報なしの詐病群でも、実際の患者と同程度に統合失調症であると診断され、情報ありの詐病群では、実際の患者以上に統合失調症であると診断された。Albertは「ロールシャッハ・テストの専門家は、その結果から詐病を見抜くことは難しい」と結論した<sup>7)</sup>。

さらにMittman (1983) は、Albertの研究は記録をとった検査者がAlbert本人だけだったという欠点を指摘し、12人の研究内容を知らされていない検査者にロールシャッハ・テストを施行させ追研究を行った。被検者は6名の統合失調症の入院患者、6名のうつ病の入院患者、18名の患者ではない産業労働者である。Albertの研究方法に従い、18名の非患者のうち6名には統制群として通常の教示でロールシャッハ・テストを施行し、6名には統合失調症を装うよう教示してロールシャッハ・テストを施行した。最後の6名には同じように統合失調症を装うよう教示した後、さらにAlbertの用いた統合失調症に関するカセットテープを聞かせてロールシャッハ・テストを施行した。その結果12名の詐病群のうち、あらかじめ情報の与えられた2名と、情報が与えられなかった1名が統合失調症を装うことに成功し、Albertの結果を支持するような傾向にあると報告した<sup>8)</sup>。

### 3. うつ病に関する詐病研究

当時の詐病研究の大部分は統合失調症に関するもので、うつ病を扱った研究は乏しかったが、Meisner (1988) は被検者にうつ病を装わせて実験を行っている。58名の大学生 (男性26名、女性32名) が心理学の授業の一環として、実験群29名、統制群29名に分けられ研究に参加した。統制群には通常の教示でロールシャッハ・テストを施行したが、実験群ではテストでうつ病を装うように教示され、DSM-III (1980) に基づくうつ病の症状の説明が行われ、うつ病を装う事への動機づけとして \$50 が提供され、実験の内容が知らされていない5名の検査者によってロールシャッハ・テストが施行された。また実験群では詐病への努力を計るために、教示後にBDI (Beck Depression Inventory : ベック抑うつ調査票) も施行された。その結果、実験群では悲観的思考であるMOR (損傷内容反応) や

BI（血液反応）が多くみられ、R（総反応数）は統制群に比べ少なかった<sup>9)</sup>。

CaineとKinder、Frueh（1995）たちは、大学の心理学部からボランティアで集めた40名の女子学生を対象に、うつ病を装わせた詐病研究を行った。被検者は統制群20名、実験群20名に分けられ、統制群には通常の教示でロールシャッハ・テストを施行し、実験群ではうつ病を装う際に、あらかじめうつ病の症状に関する説明が行われた後にロールシャッハ・テストが施行された。その結果、被検者全員が女性であったという問題点は残るが、実験群ではMOR（損傷内容反応）が多くみられた。また先行研究で有意差のみられたR（総反応数）に変化はなかった<sup>10)</sup>。

ExnerとRos（1997）は、22歳から41歳の24人の成人非患者（男性9名、女性15名）を対象に、ロールシャッハ・テストとMMPIの両テストから詐病を見抜けるのかという研究を行った。被検者を8名ずつ3グループにランダムに分け、最初のグループには統制群として通常の教示でロールシャッハ・テストを施行し、2番目のグループにはうつ病に関する知識を与えないで真剣にうつ病を装わせた（Uninformed Fakers）。最後のグループにはDSM-IIIに基づくうつ病の医学的知識を与えた後、うつ病を装わせてロールシャッハ・テストを施行した（Informed Fakers）。その結果、ロールシャッハ・テストのDEPI（抑うつ指標）を陽性にし、うつ病を装うことに成功した被検者は、MMPIではうつ病を装うことはできなかった。反対にMMPIでうつ病を装うことに成功した被検者は、ロールシャッハ・テストではDEPIは陽性にならず、うつ病を装うことはできなかった。Exnerはロールシャッハ・テストとMMPIの両テストを組み合わせれば、うつ病の詐病は見抜けるだろうと結論した。さらにうつ病を装わせた群では、悲観的な自己イメージに関するMOR（損傷内容反応）、感情の抑制を示すC'（無彩色反応）、罪悪感や後悔の念に関係するV（濃淡立体反応）が、統制群に比べ多く見られたと報告した<sup>11)</sup>。しかしこの研究では、ロールシャッハ・テストとMMPIの2つのテストを用いて、うつ病の詐病を見抜くということに焦点が当てられており、被検者にあらかじめうつ病に関する医学的知識を与えたこと、与えなかったことが、どのように影響しているのかに関しては結果が濁されている。

### Ⅲ. 問題と目的

これらのうつ病に関する詐病研究は、その多くがAlbertの研究手法、つまり被検者にあらかじめうつ病に関する医学的知識を与えた状態で行っている。この方法で被検者はうつ病を装うことに成功しているが、実際はどのような心理的過程でうつ病を装ったのか分からない。例えばExner（1997）の先行研究に見られるように、うつ病に関する医学的知識を与えられることによって「死んだ」「怪我をした」「ダメージを受けた」などの認知的なうつ状態に関するMOR（損傷内容反応）が増加することは予想できるが、知識だけでは反応することが難しいと思われる「黒いこうもり」「白いうさぎ」などのC'（無彩色反応）、「濃淡の違いで立体感や通景を知覚する」感情的なうつ状態に関するV（濃淡立体反応）までが増加したことには疑問が残る。つまり被検者は与えられた知識からだけではなく、そ

の知識を基にして実際に抑うつ的な気分を装うことで、C'、Vなどの感情に関する変数を変化させたのでと考えられる。そのような心理的過程が起こっているとすれば、知識などを与えずとも抑うつ的な感情を思い起こすだけで、被検者はうつ病を装うことができるのではないだろうか。

そこで本研究では、被検者にうつ病に関する医学的知識は与えず、これまでに経験してきた被検者自身の抑うつ的な感情を思い起こさせ、そのような気持ちになってロールシャッハ・テストを受検してもらった時、知識によらずとも抑うつ的な感情を思い起こすだけで、ロールシャッハ変数にどのような影響がでるのかを調査することが目的である。

## IV. 方法

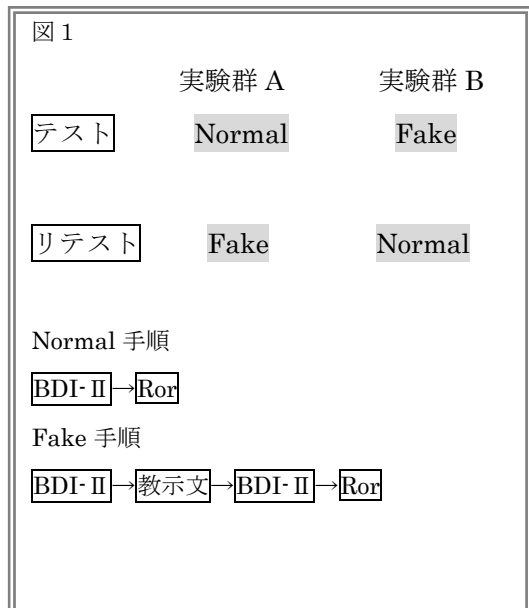
### 1. 被検者

本研究の被検者は、日本人の非患者成人で、4年制A私立大学の大学生・大学院生とした。また、32名（男性10名、女性22名）の全ての受検者は精神科通院歴、カウンセリング経験のない者である。被検者全体の平均年齢は21.34歳（標準偏差1.82）で、男性21.60歳（標準偏差2.76）、女性21.23歳（標準偏差1.57）となり、男女の年齢に有意差はない（ $U=109$ ,  $p=0.98$ ）。

被検者の募集方法は、学部の授業に出席していた学生や、ゼミに所属している学生に協力をお願いし、希望者を募った。そのほか人づてで募集した。募集の際に被検者には、「性格に関する心理テストです」とだけ伝えて、詳しい研究内容は伝えていない。全員が視力や聴力など身体状態に問題はなく全員が無償のボランティアで受検した。

### 2. 検査手順

被検者32名を、実験群A（15名：男性5名、女性10名）、実験群B（17名：男性5名、女性12名）にランダムに分け、テスト・リテスト方法で研究を行った（図1参照）。実験群Aでは、最初に日本版BDI-II（Beck Depression Inventory-Second Edition 2003：ベック抑うつ質問票）を施行し、次に通常の教示方法でロールシャッハ・テストを施行した。実験群Bでは、最初に日本版BDI-IIを施行し、次に被検者に抑うつ的な感情を思い起こさせる教示を与え、そしてもう一度、日本版BDI-IIを施行した後にロールシャッハ・テストを施行した。その後リテストとして、今度は両群の教示



を入れ替えて実験を行った。つまり実験群Aでは、最初に日本版BDI-IIを施行し、次に被検者に抑うつ的な感情を思い起こさせる教示を与え、そしてもう一度、日本版BDI-IIを施行した後にロールシャッハ・テストを施行した。反対に実験群Bでは、最初に日本版BDI-IIを施行し、次に通常の教示方法でロールシャッハ・テストを施行した。

実験群A、実験群Bとは別に、両群あわせて、普通の教示方法でロールシャッハ・テストを施行した群を**Normal群**、抑うつ的な感情を思い起こさせる教示を与えてロールシャッハ・テストを施行した群を**Fake群**とする。両群ともにテスト・リテスト間は約40日前後とした。また実験群Bを用いて、このように教示を入れ替える実験方法をとったのは、結果に与えるリテストの影響を考慮した為である。

### 3. 日本版BDI-IIについて

BDI (Beck Depression Inventory : ベック抑うつ質問票) は、抑うつ症状の自己記入式調査票として、臨床および研究上、世界的に最も頻用されている尺度である<sup>12)</sup>。

本研究で日本版BDI-IIを採用したのは、以下の3つの目的のためである。①被検者のロールシャッハ・テスト施行前の抑うつ的な感情を評価する。②被検者に抑うつ的な感情を思い起こさせる教示を与えた直後に、再度BDI-IIを施行するのは、被検者が教示内容を理解しているか確認する。③思い起こされた被検者の抑うつ的な感情を強化するためである。

### 4. 包括システムによるロールシャッハ・テストについて

本研究ではエクスナーの1974年の施行法に基づきロールシャッハ・テストを行った。今回の研究で包括システムによるロールシャッハ・テストを採用したのは、①膨大な実証データに裏づけられた検査法であり、信頼性、妥当性が確かめられていること。②最近のロールシャッハ・テスト研究において、包括システム以外の処理方法はほとんど用いられていないこと、などの理由からである。

### 5. 教示内容

教示方法は、被検者に抑うつ的な感情を思い起こさせるため、下記の内容が書かれた手紙を用意し、それを被検者に渡して読んでもらうこととした。A4の白紙にワープロで書き、三つ折にして白封筒に入れて渡した。

「気分状態と心理検査」に関する研究にご協力いただき有難うございます。  
皆さんは、「気分が落ち込む」「元気がでない」「ブルーになる」「むなしい」「なにもやる気が起きない」などを感じる経験をすることもあると思います。そこで今回の研究では、落ち込んだ時の気分を思い起こしていただき、その気分になっていただいてテストを受けてもらいたいです。落ち込んだ

ときの気分を思い起こして下さい。そしてそのような気分になってテストを受けて下さい。テスト中はできるかぎり、その気分のままでいて下さい。理解していただけたでしょうか。

これからテストを始めますが、テストを始める前に思い起こす為の時間をお取りします。十分に準備ができましたら声をかけて下さい。よろしくお願いします。

## 6. 検査者

包括システムによるロールシャッハ・テストの初級訓練を受けた者5名と、熟練者1名の計6名で、得られたデータは熟練者を含め2人以上でダブルチェックし、不一致は合議で解決した。また、研究内容を直接しらない者が、Fake群のロールシャッハ・テストを施行し、筆者は全てNormal群のロールシャッハ・テストを施行した。

## 7. 検査場面

被検者全員が個別に、最初に日本版BDI-II、次にロールシャッハ・テストを連続して同日に受検した。検査場所は心理相談やカウンセリングを目的とした心理教育相談室、大学院生の研究室、大学の授業が行われる教室などを利用し、検査時は完全な個室を確保した。Normal群は、筆者が被検者を個室に案内し、BDI-IIを被検者一人で受検させ、それから筆者が入室しロールシャッハ・テストを施行した。Fake群では、筆者が被検者を個室に案内し、BDI-IIを被検者一人で受検させ、次に教示文を被検者一人で読ませ、再度BDI-IIを被検者一人で受検させた後に、筆者以外の検査者が入室しロールシャッハ・テストを施行した。

# V. 結果

## 1. 有効なデータ数について

Exnerによると、成人被検者の大部分の反応数は17個から27個であり、反応数が32個を超える場合、その被検者は全体反応の可能性をほぼ出し尽くしているという<sup>13)</sup>。また、普通部分反応ないしは特殊部分反応の数が相対的に多くなることが予想され、平凡反応の数が平均を上回ることになる。そのため極端に長い反応数の記録を認めることは、論理的、経験的に反対であると述べている<sup>14)</sup>。そこで本研究では、ロールシャッハ・テストの妥当性の問題を考え、反応数が50個を超えた4名のデータは除外した。

また本研究ではテスト・リテスト方法を用いているので、最初のテストには参加したが、リテストには参加しなかった5名のデータも除外した。これにより最終的に有効なデータ数は32名となった。



## 2. 日本版BDI-IIの結果について

テスト時およびリテスト時における、実験群Aと実験群BのBDI得点の平均と標準偏差は表1のとおりである。Fake群ではBDI-IIは2度施行されるが、ここでは1回目の得点の方である。テスト時における実験群Aと実験群BのBDI得点を、t検定で比較したところ有意差は認められなかった。同じように、リテスト時における実験群Aと実験群BのBDI得点をt検定で比較しても、有意差は認められなかった。よって、テスト時を含めて過去2週間の、またリテスト時を含めて過去2週間の、抑うつ症状における両群に有意な差は認められなかった。

表1 実験群Aと実験群Bのテスト時リテスト時におけるBDI得点の平均と標準偏差

	実験群 A (N=15)		実験群 B (N=17)	
	平均	標準偏差	平均	標準偏差
テスト	11.2	5.35	12.41	10.09
リテスト	8.67	6.09	11.76	7.87

次にFake群における、1回目のBDI得点と、教示後に施行する2回目のBDI得点の平均と標準偏差を示したものが表2である。t検定の結果、1回目と2回目のBDI得点には有意差が認められた ( $p < .01$ )。被検者全員のBDI得点は、抑うつ的な感情を思い起こさせる教示後に、最低でも1点、最高で32点増加し、平均で14.94点増加した。

表2 Fake群における1回目と2回目のBDI得点の平均と標準偏差

	Fake群 (N=32)	
	平均	標準偏差
BDI施行 1回目	10.66	8.54
BDI施行 2回目	25.59	9.39

## 3. ロールシャッハ・テストの結果について

表3はロールシャッハ・テストの主要な変数について、全被検者32名のNormal群とFake群を比較したものである。Wilcoxon検定で比較したところ、 $p < .05$ で有意差が認められたロールシャッハ変数は、DQv/+ (発達水準・準結合反応)、M (人間運動反応)、passive (消極的な運動反応)、WDA% (一般的な領域における適切形態反応)、Hd (人間の部分反応)、(Ad) (想像上か架空の動物の部分反応)、Bt (植物反応)、PHR (貧質人間表象)であった。 $p < .01$ で有意差が認められたロールシャッハ変数は、FQ- (形態水準・マイナス反応)、Mp (消極的な人間運動反応)、XA% (全体適切形態反応)、Xu% (総反応数におけるFQ-の割合)、X-% (総反応数におけるFQ-の割合)、Cg (衣服反応)であった。

表3 Normal群とFake群におけるロールシャツハ主要変数の比較

	Normal群 (N=32)		Fake群 (N=32)		有意差
	平均	標準偏差	平均	標準偏差	
R	23.25	7.78	24.66	8.68	
W	11.25	6.09	10.59	5.49	
D	7.72	5.16	8.84	5.16	
Dd	4.28	3.74	5.22	3.86	
S	4.41	2.77	4.53	2.64	
DQ+	6.25	2.86	7.47	3.29	*
DQo	14.59	6.63	15.78	7.59	
DQv/+	0.66	1.21	0.28	0.68	**
DQv	1.72	2.07	1.13	1.16	*
FQo	9.81	3.63	10.47	3.36	
FQu	7.22	3.09	6.03	4.11	*
FQ-	5.94	4.17	7.94	4.33	***
M-	1.22	1.34	1.75	1.92	*
S-	2.25	2.06	2.78	2.24	
M	4.06	2.18	5.03	2.46	**
FM	1.94	1.78	2.16	1.59	
m	1.72	1.63	1.5	1.52	
Sum Color	3.34	2.25	3.44	2.27	
Sum C'	1.06	1.24	1.38	1.21	
Sum T	0.22	0.66	0.22	0.61	
Sum V	0.31	0.54	0.41	0.71	
Sum Y	0.88	1.31	0.72	1.14	
FD	1.28	1.22	1.19	1.18	
F	12.03	6.96	12.16	6.91	
3r+(2)/R	0.31	0.13	0.28	0.13	
Lambda	1.21	0.76	1.17	1.28	
a (active)	3.81	2.32	4.03	3.05	
p (passive)	3.84	2.38	4.72	2.47	**
Ma	1.84	1.82	1.91	2.01	
Mp	2.25	1.61	3.16	1.55	***
Blends	3.00	2.36	3.28	2.36	
Afr	0.46	0.15	0.45	0.14	
XA%	0.75	0.12	0.68	0.12	***
WDA%	0.83	0.10	0.77	0.11	**
Xu%	0.31	0.10	0.24	0.12	***
X-%	0.24	0.12	0.31	0.12	***
Isolate/R	0.22	0.19	0.21	0.19	
Hd	2.19	1.93	3.09	2.10	**
(Ad)	0.13	0.42	0.34	0.48	**
Bl	0.13	0.34	0.25	0.57	
Bt	2.00	1.92	1.31	1.23	**
Cg	2.03	1.47	3.16	2.52	***
Ls	0.91	1.17	1.25	1.44	
PHR	4.00	2.83	4.97	2.97	**
MOR	0.63	1.16	0.88	2.00	

\* p&lt;0.1 \*\* p&lt;0.05 \*\*\* p&lt;0.01

(Wilcoxon検定)

表4はロールシャッハ・テストにおける、DEPI（抑うつ指標）、CDI（対処力不全指標）、HVI（警戒心過剰指標）の3種類の特殊指標において陽性を示した被検者数を、Normal群とFake群で比較したものである。DEPIについてはNormal群で14名（43.8%）が陽性を示し、Fake群で16名（50%）が陽性を示した。CDIについてはNormal群で9名（28.1%）が陽性を示し、Fake群で9名（28.1%）が陽性を示した。HVIについてはNormal群で12名（37.5%）が陽性を示し、Fake群では19名（59.4%）が陽性を示した。それぞれの特殊指標をマクネマー検定で比較したところ、DEPIやCDIで有意差は認められなかったが、HVIでは有意ではないが、Fake群で陽性を示した被検者数が増加する傾向を示した（ $p=0.065$ ）。

表4 Normal群とFake群においてDEPI・CDI・HVIで陽性を示した被検者数

	Normal群 (N=32)	Fake群 (N=32)
DEPI > 4	14	16
CDI > 3	9	9
HVI 陽性	12	19

さらに表5は教示前後における、HVI（警戒心過剰指標）の陽性【YES】・陰性【NO】の移行人数である。Normal群でHVI陽性【YES】となり、Fake群でもHVI陽性【YES】となった被検者は10名（これをYY群とする）。Normal群ではHVI陰性【NO】で、Fake群でHVI陽性【YES】となった被検者は9名（これをNY群とする）。Normal群でもFake群でもHVI陰性【NO】となった被検者は11名（これをNN群とする）。Normal群ではHVI陽性【YES】であったが、Fake群でHVI陰性【NO】となった被検者は2名であった。

表5 教示前後におけるHVI陽性【YES】・陰性【NO】の移行人数

Normal群 → Fake群	YES → YES	NO → YES	NO → NO	YES → NO
人数 (N=32)	10	9	11	2

表6はYY群、NY群、NN群において、教示前後で有意差のあったロールシャッハ変数を比較したものである。それぞれの群をWilcoxon検定で比較したところ、 $p<.05$ で有意差が認められたロールシャッハ変数は、YY群ではpassive（消極的な運動反応）、Zd（情報処理の効率）、(H) + (A) + (Hd) + (Ad)。NN群ではMp（消極的な人間運動反応）、Xu%（総反応数におけるFQuの割合）。NY群ではR（総反応数）、Dd（特殊部分反応）、S（空白反応）、DQ+（発達水準・結合反応）、DQo（発達水準・普通反応）、FQ-（形態水準・マイナス反応）、F（純粹形態反応）、3r+(2)/R（自己中心性指標）、Zf（組織化活動の頻度）、H+ (H) +Hd+ (Hd)、(H) + (A) + (Hd) + (Ad)、Hd+Ad、Cg（衣服反応）、GHR（良質人間表象）、PHR（貧質人間表象）であった。

表6 YY群 NY群 NN群における教示前後でのロールシヤツハ変数の比較

	YY群 (N=10)		NY群 (N=9)		NN群 (N=11)	
	Normal群	Fake群	Normal群	Fake群	Normal群	Fake群
R	23.40 (7.32)	22.40 (6.08)	22.11 (6.77) **	29.67 (9.75)	23.09 (9.02)	24.00 (9.08)
W	10.00 (5.21)	9.10 (3.93)	9.56 (5.50)	11.78 (4.99)	13.09 (7.12)	11.45 (7.30)
D	9.30 (7.72)	10.20 (6.84)	7.22 (3.07)	9.22 (5.36)	6.45 (3.67)	7.73 (3.58)
Dd	4.10 (3.14)	3.10 (1.66)	5.33 (5.83) **	8.67 (4.95)	3.55 (2.34)	4.82 (2.68)
S	4.50 (1.90)	4.10 (2.33)	4.22 (3.19) **	6.67 (2.45)	4.27 (3.47)	3.55 (2.38)
DQ+	7.60 (3.56)	7.70 (2.87)	4.56 (1.24) **	7.78 (2.82)	6.55 (2.77)	7.45 (4.27)
DQo	14.60 (8.22)	13.60 (7.46)	14.33 (4.24) **	20.00 (7.97)	14.09 (7.01)	15.18 (7.10)
DQv/+	0.30 (0.68)	0.10 (0.32)	0.78 (0.97)	0.44 (0.73)	0.82 (1.78)	0.36 (0.92)
DQv	0.90 (0.99)	1.00 (0.47)	2.44 (2.51)	1.44 (1.51)	1.55 (1.75)	1.00 (1.34)
FQu	7.20 (3.01) *	5.00 (1.89)	7.22 (4.27)	8.89 (5.67)	6.55 (1.86)	5.27 (3.38)
FQ-	5.70 (3.40) *	6.60 (3.24)	5.44 (4.07) **	10.00 (4.80)	6.55 (5.35)	8.00 (4.77)
M-	1.00 (0.94)	1.50 (1.58)	1.89 (1.96) *	2.89 (2.52)	0.73 (0.90)	1.18 (1.54)
FC	1.80 (1.23)	1.50 (1.08)	1.11 (1.83)	2.22 (2.11)	2.00 (1.48)	1.55 (0.82)
CF	1.20 (1.14)	1.70 (1.49)	1.89 (1.83)	1.56 (1.33)	1.64 (1.36)	1.45 (1.13)
C	0	0	0.44 (0.73)	0.56 (0.73)	0.09 (0.30)	0.27 (0.47)
Sum T	0	0	0.11 (0.33)	0	0.55 (1.04)	0.64 (0.92)
F	12.70 (8.18)	10.90 (8.03)	10.89 (3.48) **	14.44 (4.39)	11.64 (8.10)	12.00 (8.07)
3r+(2)/R	0.34 (0.13)	0.33 (0.17)	0.26 (0.13) **	0.18 (0.11)	0.33 (0.14)	0.30 (0.08)
Lambda	1.39 (1.09)	1.58 (2.20)	1.16 (0.58)	0.93 (0.30)	1.08 (0.70)	1.00 (0.63)
p (passive)	3.50 (2.72) **	4.60 (2.88)	4.44 (2.83)	5.11 (2.67)	3.64 (1.80) *	4.55 (2.34)
Mp	2.40 (1.96)	3.10 (1.85)	2.67 (1.58)	3.22 (1.56)	1.73 (1.42) **	3.09 (1.51)
Zf	15.20 (3.04)	13.60 (2.76)	12.33 (3.84) **	16.44 (3.17)	15.36 (6.79)	14.91 (6.38)
Zd	0.25 (4.58) **	3.65 (3.39)	-2.50 (4.35)	1.17 (7.64)	1.59 (3.02)	-0.50 (5.08)
XA%	0.77 (0.12) *	0.72 (0.09)	0.74 (0.14) *	0.65 (0.16)	0.73 (0.12)	0.67 (0.12)
WDA%	0.83 (0.13) *	0.78 (0.09)	0.84 (0.06) *	0.74 (0.13)	0.80 (0.12)	0.79 (0.12)
Xu%	0.31 (0.11)	0.23 (0.07)	0.32 (0.10)	0.29 (0.17)	0.29 (0.07) **	0.21 (0.08)
X-%	0.24 (0.12) *	0.28 (0.08)	0.24 (0.13) *	0.34 (0.16)	0.26 (0.12)	0.32 (0.12)
H+(H)+ Hd+(Hd)	9.60 (2.91)	9.30 (2.58)	7.11 (3.02) **	10.56 (3.13)	7.91 (5.66)	9.00 (4.17)
(H)+(A)+ (Hd)+(Ad)	5.60 (2.27) **	3.90 (1.37)	1.89 (1.27) **	4.78 (2.64)	3.09 (3.45)	3.09 (2.39)
H+A	9.20 (5.27)	9.30 (3.50)	8.11 (2.93)	7.78 (2.95)	8.36 (2.46)	9.36 (2.84)
Hd+Ad	4.30 (2.11)	5.10 (3.07)	5.33 (3.97) **	9.11 (3.37)	4.91 (3.56)	5.82 (2.96)
Cg	3.40 (1.08)	3.90 (1.91)	0.89 (0.93) **	3.00 (1.80)	2.00 (1.18)	3.18 (3.34)
GHR	6.30 (2.16)	5.70 (2.00)	3.89 (1.36) **	5.22 (1.79)	4.18 (2.09)	5.18 (2.40)
PHR	3.60 (1.35)	4.40 (2.36)	3.67 (2.87) **	6.11 (4.01)	4.09 (3.81)	4.27 (2.61)

\* p<0.1 \*\* p<0.05

(Wilcoxon検定)

次にFake群における1回目のBDI得点と、教示後に施行する2回目のBDI得点に、 $p < .01$ で有意差が認められた結果から、Fake群における1回目と2回目のBDI得点の差が、平均である14.94点よりも高かった被検者をBDI得点の差が高い群 (N=17)、平均よりも低かった被検者をBDI得点の差が低い群 (N=15) とし、両群において教示前後のロールシャッハ変数を比較したものが表7である。同じようにWilcoxon検定で比較したところ、 $p < .05$ で有意差が認められたロールシャッハ変数は、高群ではFQu (形態水準・稀少反応)、FQ- (形態水準・マイナス反応)、WDA% (一般的な領域における適切形態反応)。低群ではS- (空白を含むマイナス反応)、XA% (全体適切形態反応)、Cg (衣服反応)であった。 $p < .01$ で有意差が認められたロールシャッハ変数は、高群でpassive (消極的な運動反応)、Mp (人間運動を含むマイナス反応)、XA%、Xu% (総反応数におけるFQuの割合)、X-% (総反応数におけるFQ-の割合) であった。

表7 BDI得点差の高群と低群における教示前後でのロールシャッハ変数の比較

	高群 (N=17)		低群 (N=15)		有意差	
	Normal群	Fake群	Normal群	Fake群	高群	低群
Dd	4.82 (4.54)	5.12 (4.57)	3.67 (2.55)	5.33 (3.02)		*
FQu	7.41 (2.76)	4.94 (3.13)	7.00 (3.51)	7.27 (4.80)	**	
FQ-	4.94 (3.33)	7.12 (3.50)	7.07 (4.82)	8.87 (5.08)	**	
S-	2.06 (1.89)	2.18 (1.67)	2.47 (2.29)	3.47 (2.64)		**
M	4.00 (2.57)	5.41 (2.72)	4.13 (1.73)	4.60 (2.13)	*	
FM	1.41 (1.00)	2.06 (1.25)	2.53 (2.26)	2.27 (1.94)	*	
p (passive)	3.41 (1.91)	5.18 (2.01)	4.33 (2.82)	4.20 (2.88)	***	
Mp	1.94 (1.34)	3.53 (1.23)	2.60 (1.84)	2.73 (1.79)	***	
XA%	0.78 (0.11)	0.68 (0.10)	0.72 (0.12)	0.67 (0.15)	***	**
WDA%	0.86 (0.08)	0.78 (0.09)	0.79 (0.12)	0.77 (0.13)	**	
Xu%	0.34 (0.10)	0.20 (0.08)	0.28 (0.08)	0.27 (0.14)	***	
X-%	0.21 (0.10)	0.31 (0.10)	0.28 (0.13)	0.32 (0.14)	***	*
Hd	2.41 (1.91)	3.47 (2.21)	1.93 (1.98)	2.67 (1.95)	*	
Bt	1.88 (2.06)	1.29 (1.40)	2.13 (1.81)	1.33 (1.05)		*
Cg	2.18 (1.74)	2.94 (2.51)	1.87 (1.13)	3.40 (2.59)		**
PHR	3.88 (2.18)	5.29 (3.00)	4.13 (3.50)	4.60 (3.00)	*	

\*  $p < 0.1$     \*\*  $p < 0.05$     \*\*\*  $p < 0.01$

(Wilcoxon検定)

## VI. 考察

### 1. BDI得点が高くなったことについて

表2にあるように、Fake群における1回目のBDI得点と、教示後に施行する2回目のBDI得点には、 $p < .01$ で有意差が認められた。これは被検者が、抑うつ的な感情を思い起こすという教示内容を理解し、BDI-IIにおいて抑うつ的な感情を装うことに成功したことを示している。そこでFake群における1回目と2回目のBDI得点の差が、平均である14.94点よりも高かった被検者をBDI得点の差が高い群(N=17)、平均よりも低かった被検者をBDI得点の差が低い群(N=15)とし、両群において教示前後のロールシャッハ変数を比較したものが表7である。これによると、BDI得点の差が平均よりも低かった低群では、S- (空白を含むマイナス反応)、XA% (全体適切形態反応)、Cg (衣服反応) の3変数でしか有意差が認められなかったのに対して、BDI得点の差が平均よりも高かった高群では、FQu (形態水準-稀少反応)、FQ- (形態水準-マイナス反応)、WDA% (一般的な領域における適切形態反応)、passive (消極的な運動反応)、Mp (人間運動を含むマイナス反応)、XA%、Xu% (総反応数におけるFQuの割合)、X-% (総反応数におけるFQ-の割合) などの、これまでに考察してきた多くの変数で有意差が認められた。つまり教示内容を理解し、よりBDI得点を増加させた被検者が、多くのロールシャッハ変数を変化させることができたと考えられる。

### 2. DEPI (抑うつ指標) やCDI (対処力不全指標) について

DEPIは抑うつ傾向を識別するための指標であり、Exner (1997) の先行研究では悲観的な自己イメージに関するMOR (損傷内容反応)、罪悪感や後悔の念に関係するV (濃淡立体反応) が多く見られたが、これらはDEPIを構成する下位変数である。CDIはDEPIの開発途上で登場し、無力型 (helpless) のうつ状態を反映している指標である<sup>15)</sup>。

表4にあるように、本研究においてNormal群とFake群では、DEPIやCDIに有意差は認められなかったが、HVIになった被検者数が増加する傾向を示した。

### 3. HVI (警戒心過剰指標) について

HVIは外界に対する警戒心が過剰であるかを示す指標で、13の変数から構成されていて全部で8つの項目に分かれている。図2はHVIの全項目で、このうち①が該当し、かつ他が少なくとも4つ以上該当する場合に陽性とされる<sup>16)</sup>。

HVIが陽性になることで、具体的にはどのような変

図2 HVI (警戒心過剰指標)

- ①  $FT + TF + T = 0$
- ②  $Zf > 12$
- ③  $Zd > +3.5$
- ④  $S > 3$
- ⑤  $H + (H) + Hd + (Hd) > 6$
- ⑥  $(H) + (A) + (Hd) + (Ad) > 3$
- ⑦  $H + A : Hd + Ad < 4 : 1$
- ⑧  $Cg > 3$

数に変化が起きたのだろうか。HVIが陽性であれば、それは警戒心過剰の状態を示しており、このような人は用心深く、外界を信用しない。たいてい、情報処理に非常に関心を持ち、刺激野のすべての特徴を注意深く調べたという保証が得られるまで、過剰にエネルギーを費やす。結果として刺激野全体に関心がいきわたらなくなり、誤った認知的媒介が助長されやすい<sup>17)</sup>。Fake群において抑うつ的な感情を思い起こさせるという教示を与えたことで、被検者はテストに対し用心深くなり、一般に期待されるよりも多くの努力をするようになったと考えられる。

表5にあるように、本研究において教示の前後で両方ともHVIが陽性であった被検者は10名である。最初は陰性であったが、教示を与えることでHVIが陽性となった被検者は9名。教示の前後で両方ともHVIが陰性であった被検者は11名であった。この3群（YY群、NY群、NN群）における教示前後のロールシャッハ変数を比較したものが表6である。

これによると、YY群ではpassive（消極的な運動反応）、Zd（情報処理の効率）、想像上の人間・動物反応の総和である（H）+（A）+（Hd）+（Ad）、NN群ではMp（消極的な人間運動反応）、Xu%（総反応数におけるFQuの割合）にのみ有意差がみられたが、教示を与えることでHVIが陰性から陽性へと変化したNY群では、最も多くの変数に有意差が示された。例えば、出現頻度の少ない部分を反応に用いたDd（特殊部分反応）の増加は、被検者が図版の細部まで注意深く調べはじめたことを示している<sup>18)</sup>。S（空白反応）は怒りや反抗心と関係しており、テストに対する被検者の構えや警戒心がうかがえる<sup>19)</sup>。DQ+（発達水準・結合反応）、DQo（発達水準・普通反応）は手堅く、質の高い情報処理活動を表しており、Zf（組織化活動の頻度）の増加も、被検者の情報処理への努力を反映している<sup>20)</sup>。H+(H)+Hd+(Hd)は人間反応の総和であり、他者への関心の程度を、（H）+（A）+（Hd）+（Ad）は想像上の人間・動物反応の総和であり、現実体験にもとづいていない他者イメージを、Hd+Adは人間や動物の部分反応であり、全体よりも細部に注意が向かっていることを表している<sup>21)</sup>。さらにCg（衣服反応）は、社会的に自分の存在を守ろうとする防衛反応とも言われている。図2にあるように、これら有意差のあった変数の多くはHVIを構成する下位変数であり、教示を与えることで被検者は、これらの下位変数の多くを増加させ、HVIを陽性にしたと考えられる。

またHVIの下位変数には入っていないが、NY群でR（総反応数）が増加したことも特徴的である。ほかの2群に比べても明らかに反応数が増加しており、これは彼らが思わぬ教示のために、一時的にしかも急激に警戒心過剰な構えを作り、一般に期待されるよりも多くの努力をするようになったことを物語っている。Rの増加に伴いF（純粹形態反応）、GHR（良質人間表象）、PHR（貧質人間表象）も増加し、変数の分母がRである $3r+(2)/R$ （自己中心性指標）は減少したと考えられる。

#### 4. DQ（発達水準）について

DQとは情報処理過程の特徴や反応の質を見極めるためのコードであり、反応の情報を相互に関連させたかどうか（結合の有無）と、反応対象を形態としてよくまとめたかどうか（特定の形態の有無）

という2つの基準から4つの水準にまとめたものである。

本研究において、表3にあるようにNormal群とFake群では、関連はあるがその対象に特定の形態がないDQv/+（例：泥のついた岩など）に有意差が認められ、Fake群ではDQv/+が減少したといえる（ $p < .05$ ）。また反応対象に特定の形態がないDQv（例：火、泥など）も同様に減少していた。

このことからFake群において、被検者の情報の取り込みが過剰な状態になったと考えられる。教示を与えることで、被検者は情報処理の際に多くの努力とエネルギーを費やすようになり、その結果DQvやDQv/+のようなタイプの反応は減り、反応対象に特定の形態も関連ももたせるDQ+（例：雲の間を通り抜けて飛ぶ飛行機）が増えて、複雑な情報処理過程になったと考えられる。

### 5. FQ（形態水準）について

反応として特定された対象の形態と、用いられた反応領域が、どれほど合致しているかを決定するコードがFQである。表3にあるように、本研究においてNormal群とFake群では、FQに有意差が認められた（ $p < .01$ ）。またFQuも有意に近い傾向を示したが、これはFQoに有意差が認められなかったことから、FQuの反応がFQ-の反応に変化したと考えられる。Exnerによるとマイナス反応は、現実を無視したり、現実を歪曲したものであり、現実検討力の低下を示すとされている<sup>22)</sup>。Fake群でマイナス反応が増加したことは、教示を与えることで、被検者の現実検討力が低下したと考えることができる。しかし全てのマイナス反応が、同じ程度で現実を無視しているわけではない。Fake群におけるマイナス反応の内容を検討していくと、人の体の一部分、人の横顔、動物の顔といった反応が多く、使われている領域も適度に正確であり、検査者が容易に確認できるものであった。これらは中程度の歪曲レベルであり、一時的なマイナス反応である。刺激野をほぼ完全に無視した深刻な認知機能低下を示す、著しいマイナス反応は増加していないことから、教示を与えることで被検者は、中程度に歪曲したマイナス反応を増加させ、一時的に現実検討力が低下したと考えられる。

### 6. Mp（消極的な人間運動反応）について

包括システムにおけるロールシャッハ・テストでは3種類の運動反応が生じる。M（人間運動反応）は人間の行動や人間的な行動を示す運動反応であり、FM（動物運動反応）は動物の行動を示す運動反応で、その種の動物に一般的に見られる運動でなければならない。m（無生物運動反応）は無生物や無機物の対象の運動や力を示す運動反応である。またすべての運動反応には、その運動が積極的（active）か消極的（passive）かを表すための肩文字（積極的はa、消極的はp）を付加する。Mpは人間運動反応（M）に消極的（p）が付いたものである<sup>23)</sup>。

表3にあるように、本研究においてNormal群とFake群ではM、passiveに $p < .05$ 、Mpに $p < .01$ でそれぞれ有意差が認められたが、Mとpassiveに関する有意差はFake群におけるMpの増加に由来していると考えられる。Exnerによると運動反応はすべて思考活動と関連しており、なかでもMpは、現実



世界の退屈さや過酷さを一時的に回避するための意図的思考である空想過程のようなものであると述べている<sup>24)</sup>。Mpの値がMa（積極的な人間運動反応）より多い時、人はストレスのある状況では防衛的に空想を使い、現実と置き換える傾向にあるといわれる。Fake群においてMpが増加したことは、教示によって何らかのストレスを感じた被検者が、不快な状況を回避するために空想による防衛手段を用いた為と考えることができる。またMpは、現実には行動として実行しない思考活動、つまり行動に移すまでの動機づけを持たない思考活動を反映している。教示を与えることで被検者は、現実的な対処方法を考えるような思考活動をとりにくかったと考えられる。

## 7. 反応内容について

表3にあるように、本研究においてNormal群とFake群では、Hd、(Ad)、Btに $p < .05$ 、Cgに $p < .01$ でそれぞれ有意差が認められた。Fake群で出現した99個のHd反応の形態水準を調べた結果、FQ-が64個（64.6%）と最も多い傾向を示した。このことから、被検者の現実検討力の低下を示すFQ-の増加と、人間の部分反応であるHdには関連があると考えられる。またHd、(Ad)、CgはHVI（警戒心過剰指標）を構成する下位変数でもあるので、これらの反応内容の増加は、教示を与えることで被検者が警戒心過剰になったことを意味するとも考えられる。

## 8. PHR（貧質人間表象反応）について

対人関係における行動やその効果を検討する為、プロトコルにおける人間表象を含む反応を2つに分類したものがGHR（Good Human Representation：良質人間表象反応）とPHRである<sup>25)</sup>。Exnerによると、GHRは効果的かつ適応的と見なせるような対人関係と関連しており、GHRの多い人は他者からの評価は良好で、対人関係上の行動にはほとんど問題が見られない。逆にPHRは対人関係上の効果的でない、適応的でない行動パターンと関連しており、PHRの多い人は対人関係の中に争いや失敗が顕著に見られ、社会的な不器用さを露見させ、その結果他者から避けられたり拒絶させることがあるとしている<sup>26)</sup>。

表3にあるように、本研究においてNormal群とFake群では、PHRに有意差が認められた（ $p < .05$ ）。これはGHRとPHRを分類する手続きにおいて、「FQ-もしくはFQnone（無形態）の反応はPHRとする」というステップがある為に、これまでに述べてきたFQ-の増加やHdの増加と関連して、PHRの値も多くなったと考えられる。

以上のような考察から、抑うつ的な感情を思い起こすという教示に対し、被検者は現実検討力の低下を示すFQ-（形態水準・マイナス反応）を増加させ、空想的な思考活動であるMp（消極的な人間運動反応）を増加させ、HVI（警戒心過剰指標）を構成するいくつかの下位変数を増加させることで、警戒心過剰な対処スタイルになったと考えられる。

またBDI-IIにおいて、より抑うつ的な感情を装うことに成功した被検者が、これらのロールシャッハ変数を変化させることができたと考えられる。

## VII. 総合考察

本研究では被検者に、うつ病に関する医学的知識は与えず、これまでに経験してきた被検者自身の抑うつ的な感情を思い起こさせ、そのような気持ちになってロールシャッハ・テストを受検してもらった。その結果、現実検討力の低下を示すFQ<sup>-</sup>（形態水準-マイナス反応）、空想的な思考活動であるMp（消極的な人間運動反応）、HVI（警戒心過剰指標）を構成するいくつかの下位変数が増加した。

### 1. BDI-IIの変化

本研究では、抑うつ的な感情を思い起こすという指示によって、被検者全員のBDI得点が最低でも1点、最高で32点増加し、平均で14.94点も増加した。これは被検者が指示内容を理解し、BDI-IIにおいて抑うつ的な感情を装うことに成功したことを示している。その理由として、BDI-IIは自己評定による認知的症状を重視した尺度であるため、抑うつ的な感情を思い起こそうとする被検者の意識レベルの変化に、著しく影響されたと考えられる。

### 2. DEPI（抑うつ指標）について

うつ病を装う際に、あらかじめ被検者にうつ病に関する医学的知識を与えてからロールシャッハ・テストを行った先行研究では、DEPI（抑うつ指標）に関連する、悲観的な自己イメージに関するMOR（損傷内容反応）、感情の抑制を示すC<sup>-</sup>（無彩色反応）、罪悪感や後悔の念に関係するV（濃淡立体反応）の増加が報告されていたが、本研究ではそれらの変数に有意差は認められなかった。指示により被検者は、BDI得点の増加にみられるように、認知的には抑うつ的な感情を装えたかもしれないが、DEPIで識別するような心理的な特徴としての抑うつ状態までは、装うことはできなかったと思われる。

### 3. 先行研究との相違

それでは、どうして先行研究とは異なる結果になったのだろうか。その理由の一つとして研究方法の違いが挙げられよう。Exner（1997）の先行研究では、うつ病に関する医学的知識という、言わば外圧を与えることでうつ病を装わせようとしたのに対して、本研究では知識は与えず、抑うつ的な感情を思い起こすという内的変化からの影響をみた。また先行研究では、統制群と実験群の被検者が異なっていたのに対して、本研究では同一被検者によるテスト・リテスト方法で行った。この2点が先行研究とは大きく異なり、結果の違いにつながったと考えられる。

二つ目は教示内容の曖昧さが挙げられる。ロールシャッハ・テストでうつ病を装うことは、かなり高度な作業であろう。そのため、先行研究ではあらかじめ知識が与えられ、「うつ病を装ってくれ」との明確な教示があったからこそ、被検者はうつ病を装うことができたが、本研究のように「抑うつ的な感情を思い起こしてくれ」とだけの曖昧な教示では、被検者には明確な課題の意図が伝わらず、テスト場面で警戒や混乱をさせてしまい、その結果、抑うつ的な感情を思い起こそうとする過程で、被検者のHVI（警戒心過剰指標）が陽性になったのではないだろうか。FQ（形態水準・マイナス反応）やMp（消極的な人間運動反応）が増加したことも、このような曖昧な教示に対する警戒や混乱から、被検者の現実検討力が低下し、課題への現実的対処を放棄してしまった結果ではないだろうか。

しかしFQやMpの増加には、他の理由も考えられる。興味深いことに前述したとおり、本研究ではBDI-IIにおいて、抑うつ的な感情を思い起こすという教示後にその得点が大きく増加した。これは被検者が、教示内容や課題の意図を理解し、意識レベルでは抑うつ的な感情を装うことに成功したことを意味している。なかでもBDI得点の増加率が高く、より抑うつ的な感情を装うことに成功したと思われる群においてFQやMpの値も増加していることから、少なくともBDI-IIが測定している抑うつ的な感情と、FQやMpには関連があると思われる。DEPIが識別できる抑うつ状態とは異なる抑うつ症状を、FQやMpが反映している可能性も考えられる。

#### 4. おわりに

本研究では被検者に、うつ病に関する医学的知識は与えず、これまでに経験してきた被検者自身の抑うつ的な感情を思い起こさせ、そのような気持ちになってロールシャッハ・テストを受検してもらった結果、現実検討力の低下を示すFQ（形態水準・マイナス反応）、空想的な思考活動であるMp（消極的な人間運動反応）、HVI（警戒心過剰指標）を構成するいくつかの下位変数が増加した。さらにBDI-IIにおいては抑うつ的な感情を装うことに成功したが、ロールシャッハ・テストではDEPI（抑うつ指標）を陽性にすることはできず、抑うつ的な感情を装うことはできなかったと言える。以上のことから、自分の中で実際に起こっていない抑うつ的な感情を、医学的知識もなく作り出すことはできなかったが、そのような状況では、学生被検者は課題にこたえようと一般的でない努力をして対処しようとし、いくつかのロールシャッハ変数を変化させることはできたと結論できる。

今後の課題として、本研究の被検者は全員が大学生であり、年齢も21.3歳と若かったことが指摘される。学生は社会的、経済的に責任を取らなくてもいい存在であり、生命を脅かされるような苦痛を伴う経験が質的にも量的にも少ないと思われる。そのため生身の体験として「抑うつ的な感情」を想起しにくく、教示通りに上手く思い起こすことが困難であったのではないかと考えられる。このように被検者の特性といった問題など、さらなる改善が求められる。

---

注

- 1) I.A.Fosberg (1938) "Rorschach reactions under varied instructions" *Rorschach Research Exchange*, 3, pp.12-30.
- 2) I.A.Fosberg (1941) "An experimental study of the reliability of the Rorschach psychodiagnostic technique" *Rorschach Research Exchange*, 5, pp.72-84.
- 3) A.L.Benton (1945) "Rorschach performances of suspected malingerers" *Journal of Abnormal and Social Psychology*, 40, pp.94-96.
- 4) A.L.Carp and A.R. Shavzin (1950) "The susceptibility to falsification of the Rorschach psychodiagnostic technique" *Journal of Consulting Psychology*, 14, pp.230-233.
- 5) K. Easton and K. Feigenbaum (1967) "An examination of an experimental set to fake the Rorschach test" *Perceptual and Motor Skills*, 24, pp.871-874.
- 6) D.T.Seamons, R.J.Howell, A.L.Carlsle and A.V.Roe (1981) "Rorschach simulation of mental illness and normality by psychotic and non-psychotic legal offenders" *Journal of Personality Assessment*, 45, pp.130-135.
- 7) S.Albert, H.M.Fox, and M.W. Kahn (1980) "Faking psychosis and the Rorschach: Can expert judges detect malingering?" *Journal of Personality Assessment*, 44, pp. 115-119.
- 8) B.L.Mittman (1983) "Judges'ability to diagnose schizophrenia on the Rorschach : The effect of malingering (Doctoral dissertation, Long Island University) " *Dissertation Abstracts International*, 44, p.1248B.
- 9) S. Meisner (1988) "Susceptibility of Rorschach distress correlates to malingering" *Journal of Personality Assessment*, 52, pp.564-571.
- 10) S.L.Caine, B.N.Kinder and B.C. Frueh (1995) "Rorschach susceptibility to malingered depressive disorders in adult females" In Butcher,J. & Spielberger,C.D. (Eds.), *Advances in Personality Assessment*, Vol.10. Hillsdale, N.J.:Erlbaum.
- 11) J.E. Exner and M.Ros Plana (1997) "Rorschach and MMPI simulation of depression" *British Journal of Projective Psychology*, 42, pp.27-38.
- 12) 小嶋雅代・古川壽亮 (2003) 『日本版BDI-II手引』 日本文化科学社。 3頁。
- 13) J.E.Exner (1986) *The Rorschach : A Comprehensive System. Volume 1 : Basic foundations. 2nd ed. John Wiley & Sons*. 高橋雅春・高橋依子・田中富士夫監訳 (1991) 『現代ロールシャッハ・テスト体系 (上)』 金剛出版。 秋谷たつ子・空井健三・小川俊樹監訳 (1991) 『現代ロールシャッハ・テスト体系 (下)』 金剛出版。
- 14) J.E.Exner (2001) *A Rorschach Workbook for the Comprehensive System. Fifth Edition*. 中村紀子・西尾博行・津川律子監訳 (2003) 『ロールシャッハ・テスト ワークブック』 金剛出版。 22頁。
- 15) J.E.Exner (2000) *A Primer For Rorschach Interpretation*. 中村紀子・野田昌道監訳 (2002) 『ロールシャッハの解釈』 金剛出版。 297頁～299頁。
- 16) 15) 同、299頁～300頁。
- 17) 同上。
- 18) 15) 同、136頁～139頁。
- 19) 15) 同、111頁～113頁。
- 20) 15) 同、135頁～136頁。
- 21) 15) 同、305頁～308頁。
- 22) 15) 同、172頁～179頁。
- 23) 14) 同、43頁～44頁。
- 24) 15) 同、211頁～213頁。
- 25) 14) 同、80頁～81頁。
- 26) 15) 同、308頁～311頁。